

全道合研 2025 第11分科会 保健体育

基調提案で中村さんは、コロナ禍後の子どもたちへの影響、学校でのいじめや不登校の増加、そして学校の中での保健室の役割について言及した。会議では、各学校の保健室の現状と課題についてのレポートが共有され、参加者たちは保健室から見える子どもたちの実態と健康課題、そして学校を取り巻く課題について議論した。

① 高校での性教育について

中道さんは高校での性教育の取り組みについて報告した。学校の様子や健康課題について説明され、養護教諭が関わった性教育の実践が紹介された。助産師による臨時保健室での相談活動では緊急避妊薬の相談事例やピルに関する相談について具体的な対応例を共有した。相談活動には生徒の積極的な参加は少なく、養護教諭が個別相談への道筋を作っているということであるが、性教育や相談活動を続けていく上により、生徒からの積極的相談は今後増えていくであろうとの意見があった。また、6月に実施された性教育の健康教育講演会について、次年度の予算化と今後の実施方法について検討し、生徒がより積極的に参加するための具体的な取り組みについて話し合った。

性教育から相談サービスにつながる力を

高校生の性教育と相談サービスの実施状況について話し合った。近年、親に何でも相談できる子が増えているものの、社会的福祉に繋がれない世帯が多い。将来の親として孤立した子育てに陥る可能性が高い生徒がいる。今回のような助産師による相談サービスの実施は重要であり、より多くの生徒に情報を提供する必要性を指摘した。

LGBTQについて

LGBTQ 生徒の指導における課題について共有し、特に男子生徒の場合、自分の性を受け入れられないという悩みがあると話された。参加者たちは、制服の柔軟性を増やすことや学習環境の整備でLGBTQ 生徒がより自然に学校生活に参加できるようになると合意した。

生徒の生活課題への対応

生徒の生活課題への対応について問題提起され、担任教師が生徒の生活状況を適切に把握することの重要性を強調した。学校が生徒の生活問題に対処する際の役割について議論し、進路指導に過度に焦点を当てていることの問題を指摘した。教師が外部の専門家と連携して生徒の生活問題に取り組むことの重要性に同意し、学校内での活動と外部との連携の両方が必要であると結論づけた。

学校外部支援者との連携

学校と外部支援者(福祉関係者など)との連携の重要性について議論された。参加者たちは、学校が「触れられない場所」として外部から見られていることへの懸念を共有し、自立支援の理念を実践する必要性について話し合った。特に、妊娠や家族の事情による退学の問題が取り上げられ、高校卒業の可能性を確保するための配慮について検討された。コロナ以降に退学者が急増していることと、生徒の悩みに対する適切な対応が不足していることを指摘した。

② 感染症(水疱瘡)の流行とコロナ禍の影響について

中村さんからは感染症のレポート報告があった。10月初旬に水疱瘡の流行が発生したことが報告された。最初の症例は9月30日に保健室にて、背中と腹部に水疱瘡の跡があつたが、患者家族は下の子どもが既に水疱瘡を患っているため、異なる個人の感染と判断した。中村さんは前学校での経験と現在の学校の雰囲気の違いについても言及し、現在の学校は和やかな雰囲気で、児童たちは挨拶を返すことが多いと述べた。

水疱瘡集団感染対応決定

中村さんは、水疱瘡の集団感染が学校で発生した際の対応について説明した。教育委員会は潜伏期間の長さから学校の閉鎖による予防効果は限定的と考えており、最終的に学芸会の開催を継続することを決定した。中村さんは、2年生のクラスで最初の感染が発生し、その後隣のクラスや6年生にも広がったことを報告し、予防接種歴の調査結果も共有した。

水疱瘡流行と接種状況報告

中村さんは水疱瘡の流行について報告し、特に2年生が他の学年より、過去の感染率が低いことを説明した。全校で411人(87%)が2回の予防接種を受けており、接種率が高く、6年生の過去の感染率が最も高く(15.85%)年下の学年ほど低いことが報告された。参加者たちは水疱瘡の予防接種スケジュール(生後12か月から15か月で1回目、続いて6~12か月後2回目)について議論し、インフルエンザとダブル感染の可能性についても話し合った。

学校における感染症対応について

参加者各校の感染症の流行について報告され、高校見学旅行等の集団発生が話題となった。参加者たちは、生徒の体調不良が発熱やインフルエンザに繋がっている可能性について話し合い、旅行会社や航空会社との連絡方法についても言及された。異動直後の中村さんは、保健室の設備や使い勝手について説明し、特に小学生の怪我の処置や担任教師への連絡体制について説明した。感染者と密接な接触を続ける中村さん自身の健康状態について、自身の免疫システムが適切に機能している可能性があると前向きに捉えているとのこと。中村さんの感染者記録の緻密さと分析力は、養護教諭として備えるべき力とも感じた。感染症発生時の養護教諭の仕事のあり方を改めて学びあつた。

③ おわりに

今年度の参加者は養護教諭4名であった。2本のレポートをもとに、各校の子どもたちの実態や保健室の様子を丁寧に共有することができた。そして、今後の課題や実践の方策が見えたのは、合研の分科会ならではの収穫であると言える。次年度は、参加者が少しでも増えることを願うとともに、体育科教員の参加があれば、子どもの「身体」についてさらに議論を深めることができると考える。今回、お忙しい中レポートを作ってくださったお二人と参加していただいた方に感謝しつつ、次年度の分科会につなげていきたい。